

機能主義的伝統と歴史認識

— パーソンズとアレクサンダーを中心として —

鈴木 健之

1. はじめに

本稿は、タルコット・パーソンズとジェフリー・アレクサンダーにおける歴史認識、並びにその理論的意義を明らかにすることを目的としている。第一に、タルコット・パーソンズの歴史認識を明らかにする。パーソンズは『社会的行為の構造』(*The Structure of Social Action*, 1937)以降、『行為理論と人間の条件』(*Action Theory and the Human Condition*, 1978)に至るまで、彼の理論的かつ実質的関心を「アメリカ社会」に注ぎ、「機能主義」という理論集団を形成しながら、「今」「ここ」にあるアメリカ社会を描いていった。パーソンズの議論を詳細にたどることで、彼の社会認識、そして歴史認識を取り出すことができるだろう。一方、アレクサンダーは『社会学の理論論法』(*Theoretical Logic in Sociology*, 1982-83)以降、最近の一連の「オバマ」論に至るまで、彼の理論的かつ実質的関心を「アメリカ社会」に注ぎ、「ネオ機能主義」という理論集団を形成しながら、「今」「ここ」にあるアメリカ社会を描いていった。パーソンズと比較すれば、アレクサンダー社会学はいまだ進化を続けており、未来が開かれているけれども、これまでの「業績」の数かずを詳細にたどることで、彼の社会認識、さらには歴史認識を取り出すことができるだろう。

パーソンズとアレクサンダーが共有するもの。それは「普遍主義」(universalism)である。彼らは「自由」、「平等」、「友愛」というフランス革命の理念が普遍主義的な近代市民社会の理念としてアメリカにおいて実現していくこと、それがアメリカの歴史となるのだという歴史認識に立つ。パーソンズの「機能主義」、アレクサンダーの「ネオ機能主義」は、普遍主義を前提にし、その実現に向けて「努力」を積み重ねていくという意味において「主意主義的」(voluntaristic)であるという点を本稿では明らかにしていく。

2. タルコット・パーソンズの歴史認識

パーソンズはアマースト大学を卒業後、イギリスとドイツにそれぞれ1年、合計で2年という短い期間であるが留学を経験している。パーソンズがいた大学は、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスとハイデルベルク大学であったが、パーソンズは「資本主義の中心」としてのロンドンと「ヴァイマル文化の中心」としてのベルリンを経験した。この歴史的事実がきわめて重要である。パーソンズは「資本主義」と「民主主義」の「最高」と「最低」を目の当たりにすることになるからだ。

パーソンズ自身、『社会的行為の構造』の「ペーパーバック版序文」で自ら回顧しているとおり、1929年の世界恐慌の勃発、1933年のナチ政権の誕生という歴史的事実は、「今」「ここ」にある危機を「見る」ことから社会学は始まるというミッションにパーソンズを向かわせることになった。パーソンズの学生時代の学問的関心が「経済学」とくにT・ヴェブレンの「制度派経済学」にあったことはよく知られている。そしてその後の留学経験において、イギリスでは古典派・新古典派経済学を学び、ドイツではマックス・ウェーバーらの経済史学を精力的に学んでいった。留学から帰り、母校のアマーストで、そしてハーバードで教えた科目は「経済学」であった。若きパーソンズは、制度派、古典派、新古典派、歴史学派等、さまざまな学派に分派した経済学の理論をM・ウェーバーの文脈で統合しようという楽観的な目論見でいた。

しかし、その統合への途は1929年の世界恐慌によって茨の道へと変わる。パーソンズにとって、「経済」の危機はそれを学問的に正当化している「経済学」の危機と同義であった。パーソンズは、「世界恐慌」を境に、経済学の無力さを痛感すると同時に、経済と経済学の危機をともに乗り越えるべく新しい社会と新しい社会の学(=社会学)を構想することになった。そして、それから4年後の1933年、ナチ政権の誕生である。「文化」の誉れ高いドイツ、その中心としてのベルリン。そのドイツにおいて「民主主義」という制度に則り、ナチ政権が誕生してしまう。パーソンズにとって、「政治」の危機はそれを学問的に正当化している「政治学」の危機と同義であった。パーソンズは、「ナチ台頭」を機に、政治学の無力さを痛感すると同時に、政治と政治学の危機をともに乗り越えるべく新しい社会と新しい社会の学(=社会学)を構想することになった。

経済と経済学の危機、政治と政治学の危機をともに乗り越えるべく、『社会的行為の構造』が上梓された。このパーソンズの初めての著作は大部なうえに、きわめて理論的で抽象度が高く、具体的なアメリカの社会問題（シカゴ大学の社会学が何よりもまず議論する「貧困」と「差別」という社会問題）を扱っておらず、かなり特異な著作であった。しかし、上述したパーソンズの「社会学のミッション」を理解するならば、精密な論証を行った結果としてこれほどの大部な著作になったということがわかる。表面上は、アルフレッド・マーシャル、ヴィルフリート・パレート、エミール・デュルケム、マックス・ウェーバーの理論的「収斂」が議論されており、その点において、経済学理論の拡張という若き経済学者パーソンズの見解は十分に達成された。

しかし、さらにパーソンズは、社会が目指すべき「目標」(goal)と社会の「目的」(end)を取り出したことで、彼は経済学者から社会学者になった。マーシャルとパレートでは、「残余範疇」であった「目的」と「規範的秩序」の関係がデュルケムとウェーバーを議論に取り込むことで明らかになっていく。ウェーバーの「手段－目的」図式はデュルケム経由で「手段－目的連鎖」として再構成された。ばらばらの「手段－目的」図式は、体系的な「手段－目的」連鎖となる。手段－目的連鎖を目的の方にたどっていくと「究極的目的の体系」が取り出せる。逆に手段－目的連鎖を手段の方にたどっていくと、「究極的手段の体系」が取り出せる。前者は「規範的秩序」(normative order)、後者は「条件的秩序」(conditional order)と呼ばれ、行為者の「手段」と「目的」はこの二つの秩序によって拘束されるという「行為の準拠枠」が設定された。

「経済恐慌」と「ナチ台頭」を目の当たりにしたパーソンズは、ジョン・ロック流に「利害の自然の一致」に頼ることも、あるいはトマス・ホブズ流に「利害の強制による一致」に頼ることもできない。「利害」や「利権」を超えて、普遍主義的な価値を「社会の目指すべき目標」として掲げ、その目標達成のために人びとが連帯すること。言い換えれば、普遍主義的な価値の実現という「目的」のために人びとが連帯することをパーソンズは説いたのである。社会は条件的秩序のみならず、規範的秩序にも拘束されている。パーソンズにおいて、利害を一致させることも重要だが、利害を超えることの方が大切である。「共通価値」(common values)による社会統合のありようを示していくことこそがパーソンズの理論的

ミッションとなったのである。フランス革命の「自由」「平等」「友愛」は、パーソンズのアメリカにおいて、普遍主義的な「共通価値」(common values)として高揚され、その価値の実現に向けて人びとが「努力」(effort)を積み重ねていくこと。これを「主意主義」(voluntarism)と名付けた。確かに、主意主義が「理論の収斂」を意味するというのは間違いではない。けれども、主意主義とは一義的には「ボランタリズム」という「イズム」＝主義・主張＝価値(「自由な個人がより大きな平等をめざし愛でつながっていかう」という「価値」)を表明したものなのだ。

アメリカという社会(アメリカ社会共同体 American societal community)が目指すべき目標・目的がこうして設定された。『社会的行為の構造』に始まり、『社会体系論』(1951)、『行為の総合理論をめざして』(1951)、『経済と社会』(1956)、『家族』(1956)、『社会構造とパーソナリティ』(1964)、『社会類型』(1966)、『政治と社会構造』(1969)、『近代社会の体系』(1971)、『社会体系と行為理論の展開』(1977)、そして最後の著作となった『行為理論と人間の条件』(1978)に至るまで、これらの著作において一貫してアメリカ社会の「価値」(究極的目的)の実現に向けて「努力」する「社会」と「個人」が描かれていく。例えば、『社会体系論』と『行為の総合理論をめざして』においてパーソンズが論じた「パターン変数」。パーソンズ自身その後、「パターン変数」を「AGIL図式」として形式論理的に演繹的に再構成してはいるものの、これは対称的な価値の組み合わせを議論したものであり、1951年の理論研究においてパーソンズが示したのは「自由」「平等」「友愛」という「共通価値」＝「普遍主義」(universalism)の実現に向けて絶えず「努力」を積み重ねるアメリカ(人)の姿そのものであったのだ。『社会体系論』以降のパーソンズの理論的関心は「機能主義」の形式化に向かっては行くものの、同時に「機能主義」の実質的関心はまったくぶれることなく、最晩年まで把持されたのである(鈴木2000)。

パーソンズが「社会体系論」と同時に展開した「行為体系論」。ここでは、文化を最上位に置き、その中間に社会を、最下位にパーソナリティを置き、文化の社会における制度化と文化のパーソナリティにおける内面化が論じられていった。社会の目的・目標＝文化が社会において実現していくことをパーソンズは「制度化」といった。『政治と社会構造』では、その制度化の例として、「公民権運動」や「帰化」の問題が議論された。普

遍主義的なアメリカの価値が「公民権」や「帰化」という形で政治的に実現していく（法的に保障される）というわけである。『家族』や『社会構造とパーソナリティ』においては、普遍主義的な価値の内面化が議論された。普遍主義的な価値の内面化には「家庭」における「しつけ」と「学校」における「教育」が何よりも重要だというわけである。普遍主義的な価値を内面化した個人が「成人」してこそ「大人」であり、これぞアメリカにおける「社会化」の在り方だとパーソンズは議論したのであった。『社会類型』と『近代社会の体系』では、アメリカ的価値＝普遍主義の強さを議論の前面に押し出し、アメリカこそ自由、平等、友愛という近代市民社会の理念の完全な実現に一番近いという、「アメリカ・ベスト」の認識を表明したのであった¹⁾。

こうしたパーソンズの「今」「ここ」、アメリカ社会の認識はその理論展開において終生変わることがなかった。パーソンズの社会認識は常に前向きであり、「昔はよかった」とノスタルジーに浸ることなどない。けれども、「普遍主義」(universalism)をめざした運動は、繰り返しそれとは対称的な「特殊主義」(particularism)によって昔に引き戻される²⁾。普遍主義と特殊主義という対称的な価値を行きつ戻りつしながら、螺旋を描くかの如く、自由で平等で愛でつながる社会をめざしていく。一見特殊主義的な運動に見えても、それがより普遍主義的な価値をめざす運動である限りにおいて正当化される。一つの価値が絶対化されれば、その帰結は「差別」と「排除」となる。絶対的価値は「相対化」されねばならない。しかし、その相対化が普遍主義を志向せず、特殊主義にとどまり続けるのであれば、その特殊主義的価値が絶対化され、新たな「差別」と「排除」を生み出してしまふ。だからこそ、パーソンズは〈特殊主義的〉価値の「一般化」を議論することで、社会の目標・目的を擁護したのであった。パーソンズにおいて、歴史は普遍主義をめざした「社会運動」(social movements)として描かれたのである。

3. ジェフリー・アレクサンダーの歴史認識

ハーバード大学のパーソンズの最後の学生であったアレクサンダーは1947年生まれ。いわゆる「ベビーブーマー」(「団塊の世代」)である。60年代後半に大学生になったアレクサンダーは、「公民権運動」も「ベトナム反戦運動」も「学生運動」も「フェミニズム運動」も「同性愛者解放運

動」も、いわゆる「新しい社会運動」(new social movements)をすべて経験することになる。そのアレクサンダーがハーバードの学部学生時代に理論的に傾倒したのは、タルコット・パーソンズではなく、カール・マルクスであった。彼が卒業論文のテーマに選んだのは「アメリカにおける労働運動」であり、まさに自他ともに認める「マルクス主義者」であった。しかし、「マルキスト・アレクサンダー」は、公民権運動における内部分裂、学生運動におけるセクト抗争、そしてベトナム戦争の泥沼化を目の当たりにし、「マルクス主義」に対する〈絶対的な信仰〉が大きく揺らぐことになる。「性の革命」どころかドラッグにまみれて「性の奴隷」になるものたち、信仰喪失後の「アノミー」に苦しむものたちのなかにあつて、アレクサンダーは、デュルケムを、そしてパーソンズをむさぼるように読んだ。とくにパーソンズはアレクサンダーにとって「精神安定剤」の役割を果たしたという。その時、アレクサンダーは、ハーバード大学ではなく、パーソンズの二人の愛弟子、ニール・スメルサーとロバート・ベラーがいるカリフォルニア大学バークレー校大学院にいた。学生運動の中心にいたアレクサンダーはその運動からの「疎外」に苛まれていた²⁾。

アレクサンダーのパーソンズ理解において、このスメルサーとベラーが大きな影響を与えることとなった。スメルサーとベラー経由で、パーソンズを読むことで、アレクサンダーは「疎外」を克服したのである。スメルサーを有名にした1963年の『集合行動の理論』(*Theory of Collective Behavior*, 1963)は、「労働運動」というマルクス主義的な実質的関心に導かれながら、さまざまな社会運動を「集合行動」の名のもとに理解し、理論的な考察を加えようとするものであった。集合行動の類型として、「パニック」や「敵意噴出行動」などが取り上げられているが、スメルサーがより理論的かつ実質的関心を注ぐのが「規範志向運動」と「価値志向運動」である。たとえば、アメリカにおける「黒人」解放や「女性」解放といった運動は「規範志向」運動である。これらの運動は、「黒人」、「女性」といったパティキュラーな価値をめざす運動と言ってよいだろう。公民権運動において、「分離」を主張したマルコムX流の運動がこれにあたるだろう。これに対して「価値志向運動」とは、パーソンズのいう「一般化された価値」、すなわち党派を超えた価値をめざす運動のことである。マルコムXとの対比でいえば、「統合」を主張したキング牧師の運動がこれにあたるであろう。「特殊主義的」な運動が「普遍主義的」な運動をめざす限りに

において、その運動は正当化されるという議論をパーソンズより継承し、スメルサーはさらなる理論化を行ったのである。アレクサンダーがこのスメルサーの『集合行動の理論』をむさぼるように読んだというのは想像に難くない。そしてそれに勝るとも劣らない衝撃を受けた本がスメルサーの『産業革命における社会変動』(*Social Change in the Industrial Revolution*, 1959)であったという。学部学生時代のアレクサンダーは、上述したとおり、アメリカにおける労働運動に関心を寄せ、それをハーバードの卒業論文のテーマとした。それとまったく呼応するかのように、大学院生のスメルサーは、ゴードン・オルポートとタルコット・パーソンズの指導の下、18世紀後半から19世紀前半のイギリスにおける労働運動に関心を寄せ、その関心に導かれてハーバードの博士論文を書いた。この本がアレクサンダーの卒業論文の導きの書となったことは間違いない。より「特殊主義的」な運動からより「普遍主義的」な運動への展開というスメルサーの理論的スタンスはアレクサンダーに正統に継承されたのである。

アレクサンダーにとって幸いなことにパークレーにはもう一人パーソンズの愛弟子がいた。ベラーである。ベラーを有名にしたのが「アメリカの市民宗教」(‘Civil Religion in America’)という論文である。ベラーは、ジャン＝ジャック・ルソーにならって(実質的にはデュルケムからの強い影響のもと)普遍主義的なアメリカ的価値を「市民宗教」(civil religion)と呼んだ。あらゆる宗教を超え、キリスト教をも普遍化する形で、アメリカを一つにまとめあげるもの＝市民宗教が建国を機に立ち上がり、現在に至るまでアメリカを一つにまとめあげているとベラーはいう。ベラーにおいても、デュルケム＝パーソンズと同様、「社会は一種独特の宗教」なのである。その後のベラーは、アメリカ市民宗教という建国以来の「伝統」において、アメリカを語っていった。ベラーの場合、スメルサー流の普遍主義の実現、「普遍主義への志向」という〈上向運動〉よりはむしろ、「普遍主義」というアメリカ的価値それ自体が描かれていくことになる。アメリカを一つにまとめあげるもの→普遍主義を一番よく体現している人＝大統領→その普遍主義的なメッセージを一番よく表しているもの＝大統領就任演説というわけで、ジョン・F・ケネディの大統領就任演説を読み解いたのである。アレクサンダーはこの論文が収録された『社会変革と宗教倫理』(『信念をこえて (*Beyond Belief*)』)もむさぼるように読んだという³⁾。アメリカを一つにまとめあげるものとして「普遍主義」そしてその隣にある

「特殊主義」というアレクサンダーの社会認識はスメルサーとベラー経由で形成された。その出発点にはマルクスがいた。

マルキスト・アレクサンダーは、スメルサーによってパーソンズに引き寄せられると同時に、ベラーによってパーソンズに引き寄せられた。上述したとおり、パーソンズの行為体系論（文化の社会における制度化と文化のパーソナリティにおける内面化）はよく知られてはいたものの、文化の一方的な「制度化」と「内面化」という下向運動を強調するパーソンズは、「今」(now)、「ここ」(here)にいる「私」(self)を出発点として、主体と主体の関りからコミュニケーション過程を論じようとするハーバート・ブルーマーらの「シンボリック相互作用論」から厳しい攻撃を受けた。しかし、今・ここ（1970年代初頭の）パークレーで、アレクサンダーは、かつてパークレーでブルーマーの同僚だったスメルサーから「価値志向」の集合行動＝新しい社会運動論を学ぶことでパーソンズ流の「規範」主義から自由になった。またベラーから「価値」の社会学＝新しい文化社会学を学ぶことでパーソンズ流の一種独特な「社会」主義（反個人主義）から自由になった。パーソンズが言うようにアメリカは普遍主義的価値を、例えば「公民権」、あるいは「帰化」という形で「制度化」（実現）してきた。しかし、アメリカ的普遍主義的価値をめざしたさまざまな運動には「バックラッシュ」（巻き返し＝反動）が必ず伴う。上述した公民権運動に対する「白人による巻き返し」（ホワイト・バックラッシュ）がその例だ。けれども、アメリカ人はアメリカ的普遍主義的価値の実現に向けて「努力」するという「主意主義」はアレクサンダーにおいても一貫して把持されるものとなり、「価値」それ自体への関心に基づく彼の社会学は、「文化社会学」（cultural sociology）として、また「市民圏」（civil sphere）論として展開されていくこととなる。こうしてアレクサンダーにおいても、歴史は普遍主義をめざした「社会運動」（social movements）として描かれていくことになるのだ。

4. ジェフリー・アレクサンダーの現状認識——オバマ論

こうして学生反乱後の「アノミー的状況」をスメルサー＝ベラー経由のパーソンズによって克服したアレクサンダーはその後パーソンズと同様にアメリカを一つにまとめあげる価値に理論的実質的関心を注ぎ続けていくことになる。アレクサンダーがとりわけ関心を注ぐのが普遍主義というア

アメリカ的価値を最もよく体現している人、すなわち「アメリカの大統領」である。1970年代の「ニクソン」論に始まり、今日の「オバマ」論に至るまで、アレクサンダーのアメリカ大統領への関心はひじょうに高い。彼の最初の「大統領論」が「文化と社会諸関係の三つのモデル——『ウォーターゲート』分析の試み」(1984)である。アレクサンダーはこの論考において、アメリカにおいてパーソンズのいう「価値の一般化」が起きたことにより、「ウォーターゲート」は〈事件〉と認識されるに至ったと論じている。この「ウォーターゲート・ビル〈侵入〉」は1972年ニクソン再選の年に起きている。米中関係を改善させ、ベトナム戦争を終結させたヒーロー(hero)は、ウォーターゲートが〈事件〉として市民に認識されるや否や、ヴィラン(villain)となる。ヒーロー・ニクソンからヴィラン・ニクソンへのドラマをニュース・メディアは伝え続けたのである。アレクサンダーは、「価値の一般化」が生じるためには、マスメディアの役割が重要であるという。『ワシントンポスト』紙が「ウォーターゲート」を〈事件〉として報道することで、「普遍主義」というアメリカ的価値が呼び戻され、市民はそれを〈大統領の犯罪〉と認識するに至ったのだという。特殊主義的な基準からは「ウォーターゲート」を犯罪とすることは困難であり、単なる「出来事」か、重大な「問題」かを判別するには「普遍主義的」な価値基準が必要となるというわけだ。普遍主義的価値をスメルサーのように「経済」に引き寄せるわけではなく、かといってベラーのように「宗教」に引き寄せるわけでもなく、かといってパーソンズのように「社会」に引き寄せるわけでもなく、アレクサンダーは普遍主義的価値を「政治」に引き寄せるのである。アレクサンダーは、パーソンズのいう政治の目的=政治の役割が「目標達成」(goal attainment)であるという議論を引き継ぎ、「普遍主義」という目標を達成するために、「特殊主義的」な利害や利権、そして価値を超えて、市民のために奉仕(サービス)する人、それがアメリカの大統領であると主張してやまない⁴⁾。

2000年代後半に始まる「オバマ」論は、これとまったく同様の「大統領」論のラインで展開されていく。しかし「普遍主義」と「特殊主義」という対称的な価値は背後に退き、「民主主義的コード」(democratic code)と「民主主義に対抗するコード」(counter-democratic coder)という対称的な「コード」という言葉に「価値」が置き換えられる。パーソンズは普遍主義的な価値の制度化と内面化について議論したが、アレクサンダーは

「価値」それ自体、言い換えれば「文化」それ自体を議論していく。アレクサンダーはパーソンズのような「文化」と「社会」との関わりにおいて展開される議論を「弱い文化理論」と呼び、それに対して「文化」それ自体を解き明かす議論を「強い文化理論」と呼び、文化の社会学(sociology of culture)ではなく、文化社会学(cultural sociology)を展開してきたのである。アレクサンダーの「文化社会学」の応用として展開される「大統領」論は、「パフォーマンス」論として展開されている。アレクサンダーによれば、パフォーマンスとは「社会的状況の意味設定に取り組む社会的な過程」とされる。それには6つの要素、①バックステージの「シンボル」とステージの「シナリオ」、②「アクター」、③「オブザーバー／オーディエンス」、④「シンボルの生産手段」、⑤演出、⑥社会的な力がある。これをアメリカ大統領選挙を例にとりて説明しようというわけである。2008年のアメリカの大統領選において、共和党から大統領候補として指名を受けたのがマケイン、民主党から大統領候補として指名を受けたのがオバマであった。共和党、民主党それぞれの「価値」＝シンボルを掲げながら、ときにそれをも超える価値＝シンボルも示しながら、マケイン、オバマ、二人の「アクター」がアメリカ大統領選という「ステージ」で、どのような「役」を演じていったのか、その時の「シナリオ」(台本)はどのようなものであったのか、それぞれの政治的「パフォーマンス」を各種〈メディア〉がどのように伝えたのか、そしてそれを見聞きした市民(傍観者[オブザーバー]としてであれ、聴衆[オーディエンス]としてであれ)はどう感じどう思ったのか。その反応を見たマケイン陣営、オバマ陣営はどのような新たな戦術を繰り出していったのか、そしてその結果どうなったのかという大統領選挙の「ドラマ」が描かれていく。この2008年のアメリカ大統領選挙を文化社会的に読み解いた『政治のパフォーマンス』で、アレクサンダーが強調しているのが〈マスメディア〉の役割である。大統領選の投票者は〈マスメディア〉を通して、大統領としての資質を問うことになる。オバマは、ブッシュJr.大統領の8年がもたらしたアメリカ社会の分裂・不平等こそが問題だとして、我こそが「連帯」(これぞ機能主義!)を回復させる「英雄」(civil hero)だとアピールし、それに対して、マケインは、オバマの「規範主義」に対して「物質主義」を強調し、ベトナム戦争時の捕虜体験を語り、アメリカ社会の危機は外在的物質的なものだとして、我こそがそれを救済する「英雄」(warrior hero)だとアピール

したとアレクサンダーは論じている。「オバマとマケインの間でアメリカ社会の危機とその救済に対する物語的な展望に対して、メディアを介した形での市民の承認を賭けた象徴的な闘争」(兼子 2015)としてアレクサンダーは2008年のアメリカ大統領選挙を描き出した。この選挙では、アメリカの社会的連帯の回復、言い換えれば「普遍主義的」価値をめざす「シヴィル・ヒーロー」としてのオバマが選ばれたというわけである。

これらの「オバマ論」においては、普遍主義というアメリカ的な価値は背景に退き、大統領選挙における対称的な民主主義的コードと反民主主義的コードが前面に押し出され、アクター並びにその陣営とオーディエンス間のメディアを介したコーディングとデコーディングのプロセスが語られていった。けれども「普遍主義」という価値をめざして「努力」を積み重ねていくという「主意主義」はデュルケム、パーソンズ、ベラー、そしてアレクサンダーへと〈正統に〉継承されているのである⁵⁾。

5. オバマからトランプへ——結びにかえて

そして2016年のアメリカ。その大統領選において、ドナルド・トランプが「アメリカ・ファースト」(アメリカ第一主義)を掲げて、ヒラリー・クリントンに勝利した⁶⁾。パーソンズ流に言えば、「普遍主義」に大きく振れたオバマのアメリカが「バックラッシュ」し、「特殊主義」に大きく振られた結果として理解できるであろう。アレクサンダーの議論を待つまでもなく、オバマはきわめて「社会学的」な大統領であった。これに対して、トランプはオバマとは正反対のきわめて「反社会学的」な大統領である。トランプのいう「アメリカ・ファースト」は、これまでの普遍主義をめざした新しい社会運動を昔に戻そうとするものであり、まったく容認できるものではない。けれどもこれがアメリカの現実であることも認めねばならないだろう。

アレクサンダーは、〈マスメディア〉が人と人とを結びつけ、市民の今日的な連帯を作ると信じていた⁷⁾。2008年、2012年のアメリカ大統領選挙におけるオバマの「普遍主義的」なシナリオをほとんどのニュース・メディアは好意的に伝えていた。2016年の大統領選挙では、そのニュース・メディアがトランプの「特殊主義的」なメッセージを批判的に伝えようとすればするほど、トランプ支持が増えるという皮肉な結果となった。ニュース・メディアの「普遍主義」が「特殊主義」的なものとなってし

まったのだ。アレクサンダーやリベラルな知識人や「博識の市民」の隣には、コンサバティブな一般人、政治的な関心はないけれども見世物として面白いという理由からトランプを支持するアメリカ人がいるのだ。普遍主義というアメリカの価値がトランプの登場によってなし崩しにされてしまうことはないだろう。しかしかつてパーソンズが経験した「社会的危機」に勝るとも劣らない新しい「社会的危機」にアメリカが直面していると言って間違いないだろう⁸⁾。

普遍主義をめざしたアメリカの歴史が終わってしまうのかどうなのか。わたしたちはしっかりと見ていかなければならない。

注

- 1) 2007年にイタリアのパーソンズ研究者であるG・ショルティエーノによって編集され刊行されたパーソンズの草稿「アメリカ社会共同体」は、パーソンズが『社会的行為の構造』から一貫して追求してきたものが「アメリカ社会の目的・目標」であったという点を明らかにしている。
- 2) ジェフリー・アレクサンダー『ネオ機能主義と市民社会』(拙訳)の「序文」を参照されたい。
- 3) ベラーの博士論文は『徳川時代の宗教』(*Tokugawa Religion*)として1957年に刊行されたが、アレクサンダーのこの著作に対する評価はさして高くはない。パターン変数を形式化した「AGIL図式」を日本の〈市民宗教論〉に応用したものである。取り上げた事例はひじょうに特定化されたものであるが、結論が一般化されすぎているのである。これは日本人の「心の習慣」、あるいは「日本における市民宗教」の〈原型〉として読むべき著作であるとするなら、石門心学が日本社会の宗教的源泉だと言われても疑問符しか浮かばない。
- 4) ジェフリー・アレクサンダーは言うまでもなく「民主党」支持である。アレクサンダーのみならずアメリカの社会学者の大半は「民主党」支持である。
- 5) 一連の「オバマ論」の前に上梓された『市民圏』(2006)において、アレクサンダーは「新しい社会運動」(公民権運動、フェミニズム運動)に加えて、「アメリカにおけるユダヤ人問題」についても議論している。アレクサンダーにおける「普遍主義」と「ユダヤ人問題」はひじょうに興味深い論点であるが、これは別稿に譲りたい。
- 6) アレクサンダーの学生、清水麻友美氏によれば、「トランプ勝利」の報を受けた際のアレクサンダーの言葉は「disaster」だったという。

- 7) アレクサンダーらは2016年、『ジャーナリズムの危機再考』という論文集を刊行した。インターネット時代におけるジャーナリズムのあり方について、アメリカのみならず、スウェーデン、ノルウェー、イギリス、スペイン、フランス、ドイツから17人の社会学者、メディア論者、コミュニケーション研究家たちが論考を寄せている。アレクサンダーは、コードの二項図式を今日のジャーナリズムにも適用し、聖なるジャーナリズム（民主主義的で体制批判的なジャーナリズム）と俗なるジャーナリズム（反民主主義で体制擁護的なジャーナリズム）という図式を呈示している。聖なるジャーナリズム（ウォーターゲートにおける「ワシントンポスト」）から俗なるジャーナリズム（イラク侵攻における「FOX TV」）へ、という「ジャーナリズムの変貌」を見れば、「ジャーナリズム危機」も容易に理解されよう。この論文集はアメリカ大統領選の最中に出版されたので、アレクサンダーはトランプの勝利を知る由もなかった。トランプ勝利の後、リベラルで批判的なジャーナリズムはトランプによって「フェイクニュース」呼ばわりされている始末である。トランプのアメリカに対して、アレクサンダーは、ジャーナリズムとアカデミズムの「連帯」を呼びかけ、さらにオバマによって形成された新しい「市民圏」を守ろうとしているのである。アレクサンダーによる『トランプの社会学』が出版されることだろう。
- 8) 2000年代以降のアレクサンダーは「普遍主義」の「主意主義的」志向を明示的に議論することはなくなっている。しかし普遍主義と特殊主義の間で揺れ動くアメリカ社会の「ドラマ」をどちらの価値に与することもなく、あくまでも〈中立〉に描こうとはするものの、アレクサンダーの「主意主義的普遍主義」という〈価値〉は理論の前提（プレサポジション）となっているのである。

文 献

- Alexander, Jeffrey C., 1982-83. *Theoretical Logic in Sociology*. (4 vols.). Berkeley: University of California Press. (=未刊, 佐藤成基・鈴木健之訳『社会学の理論論法』青木書店.)
- Alexander, Jeffrey C. (鈴木健之編訳), 1996, 『ネオ機能主義と市民社会』恒星社厚生閣.
- , 1998. *Neofunctionalism and After*. New York: Blackwell.
- , 2003. *The Meanings of Social Life*. New York: Oxford University Press.
- , 2006. *The Civil Sphere*. New York: Oxford University Press.

- , 2011. *Performance and Power: Obama's Victory and the Democratic Struggle for Power*. London: Polity.
- Alexander, Jeffrey C. ed., 1985. *Neofunctionalism*. Beverly Hills: Sage.
- Alexander, Jeffrey C. et.al., 1987. *The Micro-Macro Link*. Berkeley: University of California Press. (=1998, 石井幸夫他訳『ミクローマクロ・リンクの社会学理論』新泉社.)
- Alexander, Jeffrey C. and Bernadette N. Jaworsky., 2014. *Obama Power*. London: Polity.
- Alexander, Jeffrey C., Elizabeth Butler Breese and Maria Luengo, 2016. *The Crisis of Journalism Reconsidered: Democratic Culture, Professional Codes, Digital Future*. New York: Cambridge University Press.
- Bellah, Robert N., 1970. *Beyond Belief*. New York: Harper and Row. (=1973, 河合秀和訳『社会変革と宗教倫理』未来社.)
- Blumer, Herbert., 1969. *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*. Berkeley: University of California Press. (=1991, 後藤将之訳『シンボリック相互作用論——パースペクティブと応用』勁草書房.)
- 兼子 論, 2014, 「公共圏論のパースペクティブの刷新——アレグザンダー『市民圏』論の検討をもとに」『社会学評論』65(3): 360-73.
- , 2015, 「書評: Jeffrey C. Alexander and Bernadette N. Jaworsky *OBAMA POWER*」『大原社会問題研究所雑誌』680号: 92-6.
- Parsons, Talcott., [1937]1968, *The Structure of Social Action*. New York: Free Press. (=1974~1989, 稲上毅他訳『社会的行為の構造』木鐸社.)
- , 1951, *The Social System*. New York: Free Press. (=1974, 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店.)
- , 1966, *Societies*. Englewood Cliffs.: Prentice-Hall. (=1971, 矢澤修次郎訳『社会類型』至誠堂.)
- , 1969. *Politics and Social Structure*. New York: Free Press. (=1973~1974, 新明正道監訳『政治と社会構造』(上・下) 誠信書房.)
- , 1971, *The System of Modern Societies*. Englewood Cliffs.: Prentice-Hall. (=1977, 井門富二夫訳『近代社会の体系』至誠堂.)
- , 1978, *Action Theory and the Human Condition*. New York: Free Press. (=2002, 徳安彰・挾本佳代・油井清光・佐藤成基訳『宗教の社会学』(『行為理論と人間の条件』第3部) 勁草書房. ; 2002, 富永健一・高城和義・盛山

- 和夫・鈴木健之訳『人間の条件パラダイム』（『行為理論と人間の条件第4部』勁草書房。）
- , 2007, *American Society: A Theory of the Societal Community*. Edited by Giuseppe Sciortino. Boulder: Paradigm Publishers.
- Parsons, Talcott. et. al., 1951. *Toward a General Theory of Action*. Cambridge: Harvard University Press. (=1960, 作田啓一他訳『行為の総合理論をめざして』日本評論社.)
- Smelser, Neil J., 1959, *Social Change in the Industrial Revolution: An Application of Theory of the British Cotton Industry*. Chicago: University of Chicago Press.
- , 1963, *Theory of Collective Behavior*. New York: Macmillan. (=1973, 会田彰・木原孝訳『集合行動の理論』誠信書房.)
- 鈴木健之, 1997, 『社会学者のアメリカ』恒星社厚生閣.
- , 2000, 「パーソンズ再考」『社会学史研究』22号：89-98.
- , 2009, 「ネオ機能主義以後のアレクサンダー——個人化する社会に抗して」『社会学史研究』31号：35-50.